

TOKYO 人権

●インタビュー／矢野デイビット

他人と違って、命の価値は変わらない
他人と違うことに、生きる価値がある

人権と
スポーツ
2020

●特集

人権の視点から見れば、
オリンピック・パラリンピックは
もっと感動する

●磨けば光る原石、知的障害者のタレント事務所

他人と違っても、
命の価値は変わらない
他人と違うことに、
生きる価値がある

interview

矢野デイビットさん

ミュージシャン、タレント、
明星大学客員講師、
一般社団法人Enije代表

—ガーナから日本に移住した後、 どんな困難がありましたか？

最初はインターナショナルスクールに通っていたのですが、家庭の事情で8歳のときから児童養護施設で生活することになりました。そこから公立の小学校に通い始めましたが、見た目の違いからいじめを受けるようになりました。でも、他人と違う自分が悪いのだと思い、何もできませんでした。「みんなと同じになりたい」とずっと思っていました。5年生のあるとき、いじめられて泣いていると、担任の先生に「闘いなさ

日本人の父親とガーナ人の母親の間に生まれ、6歳で日本に移住した矢野デイビットさん。見た目の違いから、さまざまな困難を感じながら幼少期を過ごしましたが、大学時代に他人とは違うことの素晴らしさを知ります。現在では、自身の経験や思いを軸にして、社会問題をテーマとしたトークショーや多様性を楽しむイベント、さらには、ガーナの教育支援にも取り組んでいます。長い時間をかけて自分と向き合い、やがて他人との関わり合いを通して多くの気づきを得たという矢野さんにお話をうかがいました。

い。自分で自分を守りなさい！」と言われたんです。そのとき初めて、僕もみんなと同じ人間なのだから、嫌なことには抵抗していいんだと気づきました。

ある日、級友に肌の色をからかわれて、それがあまりにもひどかったので、とうとう我慢できず殴りかかったんです。そうしたら、ちょうどその瞬間に先生が教室に入ってきて、僕の方が悪いことにされてしまった。僕は学校で問題を起こしたことを、児童養護施設の職員に厳しく叱られました。しばらくすると、けんかした相手の子とその母親が施設を訪ねてきて、「息子があなたに謝りたいと言ってるの」と。それを

聞いたとき、泣きたいくらいうれしかったのを鮮明に覚えています。「自分が悪かった」と謝る勇氣と心を持った人が、この世にいるんだと初めて知ったんです。それをきっかけに、彼やほかのクラスメイトと仲良くなり、あれほどつらかった小学校生活が一変しました。

しかし、小学5、6年生はうまく過ごせたのですが、中学、高校生活は順調にはいきませんでした。見た目が違うから、どこへ行っても知らない人達からジロジロと見られ続ける毎日です。それは本当につらいことで、いつもイライラして攻撃的になり、周囲となじめませんでした。高校を卒業するとき、連絡できる同級生が1人か2人しかいなかった。何て寂しいんだろう…と思いました。

—その後、他人との関わり方が変わったきっかけは？

大学に入ってから積極的に他人と関わることを意識しました。最初、どういうふうに関係をつくればいいのか分からなかったけど、とりあえず近くの席に座った人達に「デイビットっていうんだ。よろしくね」と話しかけてみました。そうしたら、「日本語を話してる！」と、とても驚かれました。当時は、僕のような見目で日本語を話す人は珍しかったのでしょう。すぐに「どうして日本語を話せるの？」「どうして名字が『矢野』なの？」と話が盛り上がり、その様子に興味を持った人達も集まってきて、あっという間にたくさんの友達ができたとです。高校生までは他人と違うことがとても嫌でしたが、他人と違って良いんだと初めて気づきました。大切なのは他人と違うということを自分自身がどう生かすかだ、と知ったのです。

子供の時は、みんなと違うことはいけないことだと思ってしまいがちです。それを理由に冷やかされたりいじめられたりしますから。そういう境遇にいる子供達にとっては、きれいごとには聞かれないかもしれませんが、僕は講演の最後に必ずこう話します。「どれだけ他人と違っていても、自分には価値があると信じてほしい」と。同じ苦しみを感じて育ちながら、でも、そう信じて生きている大人がいることを覚えてほしいのです。

周囲とうまくなじめなかったころ、みんなが僕を嫌っていて、僕はこの世に必要とされていないんだと思って生きていました。そういう考えを、僕自身が変わえることは大事なのですが、そう思わせてしまう社会の側により大きな問題があると思います。子供は大人を見て学ぶものです。僕ら大人が、マイノリティを否定する気持ちを持っていると、それが子供達にはちゃんと伝わってしまうのです。

人は「こうでなければならない」という思い込みを

持てば持つほど、それに合っていない人を許せなくなってしまう。他人と違うということを嫌う人達は、どこかで自分の価値観が絶対的に正しいと信じているのではないのでしょうか。でも僕は、「あなた達の考えこそ間違っていると思っている人達も世の中には大勢いるんだよ」と、そんな人達に問いかけてみたいのです。

—いろんな人が参加する運動会を*4ページ下参照 企画しているそうですが、なぜですか？

「運動会」は、他の国には無い日本独自の文化で、技術的なスキルを問われない、アスリートではない“普通”の人達誰もが参加できる素晴らしいスポーツイベントなんです。そこでは国籍とか障害の有無とかも関係ありません。競技に参加することで他人と関わり合い、チームになって力を合わせることができる。そうすると、偏見や固定観念みたいな変なこだわりを取り払うことができ自由になり、心の底から今を楽しむことができるんです。人は、堅苦しく考えて、知らず知らず自分をごんじがらめにしてしまうと、他人も自分も幸せにはできないし、豊かにすることもできない。心を解放して楽しむことができたなら、みんながハッピーになれると思うんです。

僕は自分のもう一つのルーツである、西アフリカのガーナ共和国での教育支援活動に力を入れています。一方で、日本には、みんなが生きて喜びを感じられるような“支援”が必要だと思っています。僕らは日本人達にはもっと笑顔が必要だ思う。ガーナの人達は貧乏ですが、でもみんな笑顔が輝いています。お金やモノは無くても、みんな生きる喜びにあふれているんです。でも、日本は経済的・物質的に恵まれているのに、年間の自殺者が何万人もいて、なんとなくみんな疲れた顔をしている。それはとてもおかしいことだと思いませんか？

社会には、さまざまな理由で疎外感を感じながら生きている人達がたくさんいます。僕らはどうしても、見た目だけで他人を判断してしまいます。でも実は、どんな人でも皆、他人と共有できない部分、生きる上での困難さ、“障害”みたいなものを何かしら持っています。たまたまそれが他人には見えない、見せないだけで、一人ひとりが自分の中で、そうした困難と折り合いをつけて生きている。僕らはまずその事実を意識しなければいけないと思うんです。

言葉で伝えて理解してもらうのはなかなか難しい。けれど、それを可能にするのが運動会なんです。スポーツを通してなら、言葉が話せなくても他人と通じ合えるし、日常では出会えないような人達とも友達になれる。多様な関わり合いを通して、「何よりも大事

なのは、心のあり方なんだ」と気づいてもらえたらうれしいです。そうすれば、気づきを得た人が知り合いを連れて二度三度と参加してくれるかもしれませんよね。こうして、多様性を楽しむ遺伝子を、人々の心の中で次々に目覚めさせられたらいいなと思っています。

イベントをするときに心を配っているのは、参加するときのハードルを低くすることですね。社会は、問題意識の高い一部の人だけでは変わりません。だから、この運動会では堅苦しい理念や厳しいルールは設けず、社会問題に興味を持っていない人でも気軽に参加できるようにしたいと思っています。

できれば、今年2016年の秋以降に第1回を開催したいです。年1回のペースで行い、東京オリンピック開催の年には、競技に出場してくれる人達だけではなく、スタジアムで盛り上げてくれる観客も含め、“普通”の人達5万人が参加する大運動会にしたいと思っています。マイノリティの人達、外国人と障害者の人達には特にたくさん参加してほしいな。初めての試みで大変なこともあるかもしれませんが、絶対にみんなが楽しめるイベントになると思います。ボランティアの人達や協賛していただける企業の方々を大募集しています。それから、外国籍や障害者のコミュニティとつながりのある方にも、ぜひ協力してもらいたい。

そのためにも、僕自身が「力を貸してあげたい」と思ってもらえる人間になれるよう、自分を育てていく必要があると感じています。

—今後の活動について、 展望を聞かせてください。

ガーナでの教育支援をおこなうために、一般社団法人Enije (エニジェ) を立ち上げ、日本で行ったフットサルイベントなどで集めた資金を基に、2010年に、つぶれかかっていた幼稚園を再建しました。それから2014年には中学校を新たに開校しました。校舎がまだ足りないのも、もっと資金を集めたいと思っています。

実際に学校運営に携わってみると、施設を作るだけでは十分ではないことが分かってきました。教員の養成も必要ですし、学校に通いたくても通えない貧困層の子供たちへの経済支援も必要です。こうした中で気づいたのは、「教育はまちづくり」でもあるというこ

* 計画中の運動会について

その名も「地球大運動会」。ただ今、2016年秋以降、都内での実現に向けプロジェクト進行中。関心のある方はぜひともご連絡ください。

地球大運動会実行委員会 「地球大運動会」に関するお問合せ
info@enijeproject.com (担当: ワニベ)

「地球大運動会」ボランティア参加希望はこちら
b@enijeproject.com (担当: ワニベ)



とです。子供達が学校に通うには、その親が働いてお金を稼ぐことが必要で、そのためには雇用が充実していなければなりません。そしてもちろん、学校を卒業した子供達にも働き口が必要です。そこで、現在は町に雇用を生み出す取り組みも進めています。

さまざまな活動をする中で、僕が一番うれしいと感じるのは、自分の経験が次の世代に必要なものとなった瞬間です。子供達に生きるヒントを伝えられたり、役立つものを形にできたりすることは、僕にとってとても幸せなことです。いろいろと苦しい思いをしたけれど、あの経験があったからこそ今の自分があるし、次の世代のためにできることがある。経験したことすべてを本当に良かったと、今は思えます。

インタビュー/鎌田 晋明 (東京都人権啓発センター 専門員) 編集/小松 亜子
撮影 (表紙・2~4ページ)/加藤雄生

profile



● 矢野デイビット (やの・でいびつと)

1981年生まれ。日本国籍。ミュージシャン、タレント、明星大学客員講師、一般社団法人Enije代表。6歳のときに両親と兄、弟とともにガーナから日本へ移住。18歳まで児童養護施設で育ち、ピアノやサッカーに打ち込む。大学に進学後、20歳からモデルの仕事を始め、「ユニクロ」「リカルデント」「エネルーブ」「インテル」などのCMに採用され、注目される。その後「すぼると!」「世界ふしぎ発見」などのテレビ番組にも出演。その傍ら、ピアノの弾き語りを始め、2013年には兄弟3人でボーカルユニット「YANO BROTHERS」を結成し、演奏活動を行っている。25歳のときに、ガーナでストリートチルドレンと出会ったことを機に、自立支援団体Enijeを設立。これを2012年に一般社団法人化し、日本国内でのイベント収益を基に、ガーナの教育支援に取り組む。コミュニティ全体の経済支援の他、教員養成施設、児童養護施設の設立も目指している。また、トークイベント「箱舟に積むモノ」を開催し、当事者を招いて社会問題をシェアする活動なども行っている。学校や企業などでの講演多数。

● 矢野デイビット オフィシャルサイト
<http://davidyano.com/>

● 一般社団法人Enije
<http://enijeproject.com/>



「スペシャル」な才能を芸能界に送り出す

磨けば光る原石、知的障害者のタレント事務所

欧米では、テレビドラマや映画の中に多くの障害者が登場し、またその役を、多くの障害者達自身が演じています。「知的障害者に演技はできない」という誤解を解き、当事者がメディアに登場する機会を増やして、障害への理解を広めようと挑戦する社会的企業取材しました。

7月の昼下がり、西新宿のとあるスタジオの一室で20人ほどの若者たちが演劇の稽古に打ち込んでいました。このとき練習していたのは、障害の有る女性が、同じく障害の有るパートナーの男性に妊娠を告げる場面。男性が女性を抱きかかえて飛び跳ね、子どもを授かったことの喜びを表現し、それを仲間たちが一緒になって祝う——。つい先日上演された、知的障害者同士の恋愛と自立をテーマにしたミュージカルに出演したのは、障害児・者の芸能事務所、(株)ケイプランニング芸能部SPクラスの所属タレントたちです。SPとは「スペシャル」の略で、現在50人ほどのメンバーは皆、知的障害者です。

欧米では、テレビドラマや映画で、障害者自身が障害者を演じることは珍しくありませんが、日本では同事務所設立まで、あまり例がありませんでした。代表の国枝秀美さんが社内に芸能部を立ち上げたのは2008年。きっかけは、自身がプロデューサーを務めた映画の監督が、障害児の役に、多くの障害児を起用したことでした。

「知的障害の有る人たちと触れ合ったことが全く無かったので、最初は不安でした。でも実際に会ってみて、ちゃんと演技もできるし『大丈夫だ』と安心しました。それどころか、場の空気を優しくするような、特別な才能を感じましたね」(国枝さん)。

国枝さんは、その映画の撮影現場で障害児の保護者から欧米でのドラマや映画への出演状況を聞かされ、その後、自身の目で確かめようと米ロサンゼルスに専門事務所を視察しました。

「仕事として年間150もの出演が有るとの事実は衝撃的でした。すごい、日本でもやりたい！と希望を胸に帰国して、日本で初めて専門の芸能事務所を、社内の芸能部としてスタートすることを決意しました」と、国枝さんは当時を振り返ります。

当然ながら所属メンバーは芸能界の厳しい競争に容赦なくさらされます。仕事は均等に分配されるわけではありません。努力は必ずしも報われず、役が

もらえる人とそうでない人の差は明らかに生じます。それでも、と国枝さんは期待を込めて言います。

「私は「福祉」ではない場で彼らを活躍させてあげたい。一人前のタレントとして舞台上に立ち、自分自身の力で社会に訴えてみる！と背中を押ししたいのです。彼らにはそれができる才能が十分あるし、理想に近づくよう励むことが、彼ら自身が社会で生きていくための力につながるはずですよ」(国枝さん)。

事務所開設から8年がたち、幼かったメンバーたちは日々立派に成長しています。数人は成人して今でもメンバーとして活動しています。そして、映画やテレビに多数出演して頭角を現すようになってきたメンバーも出てきて、少しずつその想いが形になってきました。

国枝さんは、障害者として生まれてくること自体が不幸なことだと、世の中の大勢の人たちが誤解していることが、とても気になっていると言います。

「実際の障害者を知らないからでしょう。人は知らないものに恐れを感じるもの。その一つの原因は、当事者自身がメディアに出ることが少ないからでしょう。才能にあふれた輝く姿を大勢の人たちに知ってもらえれば、世の中はきっと変わる。障害者の芸能事務所は、そのための仕事です」(国枝さん)。

障害者タレントの活躍をスクリーンで見ない日は無い。そんな日が来るのが、とても楽しみです。

インタビュー／鎌田 晋明(東京都人権啓発センター 専門員) 編集／脇田 真也

もっと知りたい!

『子育て手記 障がいだってスペシャル』
内海那ー&ケイプランニング 編
雲母書房 刊

障害児／者とその家族たち。その底抜けの笑顔をつくるものは？ 子育てをする人たちがすべてを元気にさせる一冊。



<取材先情報>

・(株)ケイプランニング 芸能部 SP クラス <http://www.9292.co.jp/>



楽しそうだけど真剣な稽古場
その姿は、さすがプロ!

人権の視点から見れば、 オリンピック・パラリンピックは もっと感動する

2020年の東京大会に向け、本誌はオリンピック・パラリンピックを人権の視点から見つめる連載を始めます。第1回となる今回は、オリンピックの根幹にある人権尊重の理念について、首都大学東京特任教授の舛本直文さんにお話をうかがいました。

オリンピック憲章が謳う 人権の尊重

オリンピック・パラリンピックは、4年に1度のスポーツの祭典として、多くの人々が選手のメダル争いに注目します。しかし、オリンピックはもともと、スポーツを通じた教育や平和のために誕生した祭典で、人権と深い関わりがあるのです。

「近代オリンピックの父」と呼ばれるフランスの教育家、ピエール・ド・クーベルタン男爵は、スポーツは体を鍛えるだけでなく、心身の調和のとれた人間を育成し、フェアプレーの精神や友情、道徳、連帯感を育むことができると考えました。さらに、国際的な競技会で他国の選手と親しくなり、多様な文化や芸術に触れることで、平和な社会の実現につながると考えたクーベルタンはオリンピックのあるべき姿として、「オリंपィズム（オリンピック精神）」を提唱しました。そして、1894年に国際オリンピック委員会（IOC）が設立され、古代ギリシャで行われていたオリンピックは復興されました。

オリंपィズムの根本原則（抜粋）

- オリंपィズムの目的は、人間の尊厳の保持に重きを置く平和な社会を奨励することを目指し、スポーツを人類の調和の取れた発展に役立てることにある。
- スポーツをすることは人権の1つである。すべての個人はいかなる種類の差別も受けることなく、オリンピック精神に基づき、スポーツをする機会を与えられなければならない。オリンピック精神においては友情、連帯、フェアプレーの精神とともに相互理解が求められる。
- このオリンピック憲章の定める権利および自由は人種、肌の色、性別、性的指向、言語、宗教、政治的またはその他の意見、国あるいは社会のルーツ、財産、出自やその他の身分などの理由による、いかなる種類の差別も受けることなく、確実に享受されなければならない。

（日本オリンピック委員会「オリンピック憲章」2015年版・英和対訳より）



舛本直文さん

十九世紀末、ヨーロッパ列強による植民地争奪と勢力圏拡大が激しさを増し

ていた時代に復興されたオリンピックは、こうしたクーベルタンの教育と平和の思想に基づいているのです。そして、1908年にはIOCにより「オリンピック憲章」が制定され、その後定められた根本原則には、「人権の尊重」が謳われています。

オリンピック研究やスポーツ哲学が専門の首都大学東京特任教授、舛本直文さんは次のようにいいます。「人が平和に生きるには、人権が満たされていなければなりません。平和をめざすオリンピックの根幹に人権が位置づけられているのは理にかなったことです」。

しかし、このような志を掲げながらも、オリンピックはさまざまな人権問題を抱えてきました。

オリンピックが直面してきた 様々な人権問題

オリンピックの人権問題として、第一に、「女性の参加」と「性的少数者」の問題が挙げられます。

舛本さんは「1896年の第1回アテネ大会では、女性は参加できませんでした」といいます。当時の大会は、絶対神ゼウスを崇めるために行われていた祭典競技「古代オリンピック」をモデルにしており、これが女人禁制だったためです。「まだ女性の権利が十分に保障されていない時代だったこともあり、クーベルタン自身も女性の参加には反対していました」（舛本さん）。

1900年の第2回パリ大会からは、女性も参加するようになり、時代とともにその競技数も増えていきます。ところが、1964年の東京大会で、“男性のような”体格をした女子選手が陸上競技でメダルを獲得したことで、性別を疑う議論が起こりました。「その結果、1968年のメキシコ大会から、女性だけ性別検査が始まりました。これが女性の人権侵害にあたりと多くの抗議がされますが、1999年に中止されるまで30年以上、女性のみ検査が続きました」（舛本さん）。

また、2014年のソチ冬季大会では、開催国のロシアにおける性的少数者に対する差別が問題となりました



東京オリンピックメモリアルギャラリー（世田谷区駒沢公園 1-1）には1964年大会を中心に様々な資料が展示されている。当時の競技プログラムにはピクトグラムがデザインされている。



だが、IOCは、2014年末にオリンピズムの根本原則を改訂し、第6項に“性的指向による差別禁止”を加えました。「単に性的指向の単語を追加するのではなく、第6項全文が世界人権宣言の条文に近い文章になった点で、IOCが人権尊重という課題に力を入れていることがうかがえます」（舛本さん）。

人種差別との闘い

さらに、人種差別問題も、オリンピックに大きな影響を及ぼしてきました。例えば、アパルトヘイト（有色人種の隔離政策）を行っていた南アフリカ共和国は、1964年の東京大会以降、参加が認められず、1971年にはオリンピックから追放されます。復帰したのは、1991年にアパルトヘイトを撤廃した翌年のバルセロナ大会からでした。

また、1968年のメキシコ大会の陸上男子200mで、金メダルと銅メダルを獲得したアメリカ国籍の黒人選手が、表彰台でアメリカ国旗から顔を背け、黒い手袋をはめた拳を高く突き上げました。黒人差別に抗議する“ブラックパワー・サリュート”と呼ばれるこの行為は大きな物議を醸しました。オリンピック憲章では、競技会場などでの政治的パフォーマンスを許可していません。2人の選手は直ちに選手村を追放されました。ところが、実はこのとき、銀メダルを獲得して同じ表彰台上ったオーストラリアの白人選手も、人権侵害に反対する白いバッジをつけていたのです。「スポーツ界では、白人選手の間でも人種差別に反対する動きがあったのです」（舛本さん）。

障害者のスポーツ参加とパラリンピックの発展

パラリンピックは、戦争で脊髄を損傷した兵士のリハビリとして、イギリスのストックマンデビル病院で行われた車いすアーチェリー大会が基になっています。1960年のローマ大会開催後に、初めてパラリンピックが開催され、車いす選手によるアーチェリーや卓球

など8競技が行われました。車いす選手以外の障害者選手がパラリンピックに参加するようになったのは、1964年の東京大会からです。「東京大会は、より多くの障害者にスポーツへの道を開いたといえるでしょう」と舛本さんは語ります。

また、舛本さんは、近年のパラリンピックでは2014年のソチ冬季大会が印象に残っているといいます。「選手村に、国連障害者権利条約に賛同する人がサインすることができるボードが設置されました。東京は2度目のパラリンピックを開催する初めての都市でもあるので、こうした有意義な取り組みを積極的に取り入れた方が良いと思います」。



1964年東京パラリンピック大会ポスター（東京都人権プラザ「みんなのスポーツ展」より）

大会を通して人権のレガシーを残すために

オリンピック憲章は大会開催地にレガシー（遺産）を残すことを目標としています。舛本さんは、1964年東京大会のレガシーの一つに「ピクトグラム（図記号）」を挙げます。「競技だけでなく施設や設備にもピクトグラムが体系的につくられたのは、東京大会が初めてでした。多様な国の人たちがピクトグラムで情報を理解する、言語のバリアフリー化に貢献したのです」。

オリンピックはさまざまな人権問題に直面してきましたが、2020年東京大会を通して私たちはどのような人権尊重のレガシーを残すことができるのでしょうか。東京大会のエンブレムには「みんなの輝き、つなげていこう。Unity in Diversity」^{ユニティ イン ダイバーシティ}という広報メッセージが添えられます。舛本さんは「一人ひとりの多様性を意味するDiversityという言葉は、人権啓発において大変重要」と指摘します。「オリンピック・パラリンピックを通して平和や国際交流、異文化理解などが深まり、多様性を尊重する人権感覚が育つことに期待したいですね」（舛本さん）。

これから私たちも、オリンピック・パラリンピックの話題を人権の観点からも見ることで、より深い理解や感動が得られるのではないのでしょうか。

インタビュー / 林 勝一（東京都人権啓発センター 専門員） 編集 / 小松 亜子



「多様性と調和」の実現を目指して
HP 「じんげんのとびら」にPDF掲載
編集・発行：東京都総務局人権部
オリンピック・パラリンピックと人権
企画・製作：(公財)人権教育啓発推進センター



人権啓発行事のご案内

東京都人権プラザ移転のお知らせ

- 移転先(本館) ※開館時期 平成29年1月(予定)
住所 港区芝2-5-6 芝256スクエアビル 1・2階
- 現在の人権プラザの経過措置
「分館」として、平成29年度末まで残す予定です。
図書資料室は、8月末で閉室しています。
- 詳細は、下記の東京都の報道発表資料をご覧ください。
<http://www.metro.tokyo.jp/INET/OSHIRASE/2016/06/20q6t600.htm>
- お問い合わせ
東京都 総務局 人権部 人権施策推進課
TEL 03-5388-2588 FAX 03-5388-1266

9月は東京都自殺対策強化月間です

行事

こころといのちの講演会
「若者の自殺予防を考える」

- 第一部
講演 「生きづらさへの処方箋～若年層の自殺の実態と今、私たちにできること～」
講師 根岸 親 (NPO法人 自殺対策支援センターライフリンク 副代表)
- 第二部 大学生によるワークショップ
- 日時 平成28年9月13日(火) 14:00～17:00
- 会場 東京都庁 第一本庁舎 5階 大会議場
<http://www.fukushihoken.metro.tokyo.jp/iryo/tokyokaigi/rinjii1/kouenkai.html>



入場無料

事前申込制

相談

特別電話相談
「東京都自殺相談ダイヤル
～こころといのちのほっとライン～」

- 電話 0570-087478
- 日時 平成28年9月12日(月)～16日(金) 24時間
※年中無休。上記以外の日は14:00～翌朝5:30
http://www.fukushihoken.metro.tokyo.jp/iryo/tokyokaigi/torikumi/campaign/campaign_2809.html
- お問い合わせ
東京都 福祉保健局 保健政策部 保健政策課 自殺総合対策担当
TEL 03-5320-4310 ※詳細は上記ホームページをご覧ください



B

人権問題都民講座のお知らせ

自殺問題
～若年世代へ生きる支援を～

高い水準が続く若年層の自殺率。どのような対策と支援が必要なのか。トークセッションを通じて考える。

- 日時 平成28年9月22日(木・祝) 14:00～16:00
- 会場 東京都人権プラザ 3F ホール兼視聴覚室 (台東区橋場1-1-6)
- 講師
堀遼一: 特定非営利活動法人 自殺対策支援センターライフリンク
鎌田悠香子: 特定非営利活動法人 Light Ring.
伊藤次郎: 特定非営利活動法人 OVA (オーヴァ)
- 定員 100名(事前申込制、先着順、無料)
- 主催
東京都人権プラザ (指定管理者・公益財団法人東京都人権啓発センター)
- お申し込み・お問い合わせ
(公財) 東京都人権啓発センター 普及情報課
TEL 03-3876-5372
FAX 03-3874-8346
<http://www.tokyo-jinken.or.jp/>



C

人権啓発行事のお知らせ

大島花子コンサート(仮称)
9月8日より申込受付開始!

- 日時 平成28年11月8日(火) 19:00～20:30(予定)
- 会場 浜離宮朝日ホール 音楽ホール (中央区築地5-3-2)
- 出演者
大島花子(歌手)
ほかゲスト出演予定
- 定員 550名 (事前申込制、先着順)
- 参加費 無料
- お申し込み・お問い合わせ
(公財) 東京都人権啓発センター 普及情報課
TEL 03-3876-5372
FAX 03-3874-8346
<http://www.tokyo-jinken.or.jp/>



(公財)東京都人権啓発センター賛助会員募集のご案内

皆様とパートナーシップを築き、人権意識の高揚、人権問題の解決に向けて、ともに手を携えてまいりたいとの趣旨から賛助会員制度を設けております。趣旨にご賛同いただき、ご加入下さるようご案内申し上げます。

個人
賛助会員

一口 2,000円

団体
賛助会員

一口 30,000円

● お問い合わせ

(公財) 東京都人権啓発センター
総務課

TEL 03-3876-5371

※ 皆様の
団体の
会員の

- | | | | | | |
|------------------|----------------|---------------|--------------|-------------|-----------|
| (公財) 東京都中小企業振興公社 | (一財) 東京都営交通協会の | 東京臨海高速鉄道(株) | 東京都商工会連合会 | (一財) 東京都弘済会 | (一財) 日本機構 |
| (株) 首都圏環境美化センター | (一社) 東京都信用組合協会 | (公財) 東京都環境公社 | 東京臨海熱供給(株) | 自治労東京都本部 | 東京港埠頭(株) |
| (公財) 東京都歴史文化財団 | 東京人権啓発企業連絡会 | (有) 東京エイドセンター | (株) 東京ビッグサイト | (株) 東京交通会館 | (株) ゆりかもめ |
| (株) ミライト・テクノロジーズ | (公財) 東京都学校給食会 | (公財) 東京しごと財団 | (公財) 東京観光財団 | 東京食肉市場(株) | (有) 関東紙業 |
| 東京都中小企業団体中央会 | (一社) 東京環境保全協会 | 東京都住宅供給公社 | (公財) 東京税務協会 | NPO 法人 TEOS | |
| 東京都下水道サービス(株) | (株) 東京国際フォーラム | 東京都職員信用組合 | (公大) 首都大学東京 | (株) 日本アクセス | (順不同) |

● 編集後記

「自分は幸せで生きている価値がある」と心の中で思っているだけでは不十分なのか? 障害者だからといって他者に幸せをアピールしなければ生きていけないのだとしたら、そんな不当なことはない(餃)

ブラインドサッカー、視覚障害者とのボウリング、ポチャッとしてゴールボールの体験会に参加した。どれも実に楽しい。自分でやってみると、これから始まるパラリンピックがもっと楽しみになる。(林)

TOKYO人権 Vol.71 2016年秋号
2016年8月31日発行(年4回発行)

- 制作・印刷 / 株式会社トライ
- 発行 / 公益財団法人 東京都人権啓発センター
〒111-0023 東京都台東区橋場1-1-6 東京都人権プラザ内
TEL 03-3876-5372 FAX 03-3874-8346
<http://www.tokyo-jinken.or.jp/>



マルチメディアDAISY版を作成しています。ご希望の方は(公財)東京都人権啓発センターまでお問い合わせください。
「DAISY(デザイン)」とは、視覚障害などさまざまな理由で活字を読むことが困難な方のための、デジタル図書です。

この冊子は再生紙を使用しています。

